

3. 鳥類調査



カルガモ (カモ科)



アオサギ (サギ科)



イソシギ (シギ科)



サシバ (タカ科)



コゲラ (キツツキ科)



カケス (カラス科)



センダイムシクイ (ムシクイ科)



クロツグミ (ヒタキ科)



コサメビタキ (ヒタキ科)



キビタキ (ヒタキ科)



イスカ (アトリ科)



ノジコ (ホオジロ科)

(1) 調査目的・背景

水田や魚野川、奥只見湖等の水辺や越後三山、守門岳等の山々など、変化に富んだ自然環境を有する魚沼市には、様々な野鳥が生息、飛来している。また、市内には越後三山鳥獣保護区や湯之谷奥只見湖鳥獣保護区をはじめ、8か所の鳥獣保護区が指定されている。

2012年度から実施している、本調査では鳥獣保護区に指定された地域を中心に、市民にとって身近な“里山”と呼ばれる場所を選定し、鳥類調査を実施した。

本年度は、昨年度に調査を実施した5か所のうち3か所を継続して調査し、未観察である鏡が池周辺を新たに調査した。

また、調査という位置づけで探鳥会を兼ねた形で市民参加型の調査を実施することで、市民が鳥類や生息する自然環境への興味関心をさらに深めてもらう事についても目的とした。

(2) 調査地域の位置

調査地は、夏鳥調査については、成田山鳥獣保護区（旧小出町青島「見晴らしの湯こまみ」周辺、以下こまみの湯周辺。）、御嶽山鳥獣保護区（旧堀之内町大石 杉ノ入沢）の2か所に加え、鏡が池周辺（旧入広瀬村鏡が池、破間川兩岸）の調査を実施した。冬鳥調査については、旧小出町の青島と大浦新田を中心とした魚野川周辺の調査を実施した。

1) こまみの湯周辺

旧小出町青島にある成田山付近にある駒見山を踏査した。東経138度57分、北緯37度13分に位置し、周辺には「小出スキー場」や「見晴らしの湯こまみ」が隣接する。調査ルート付近には雑木林が多く、水田や養鯉池が点在している。

2) 杉ノ入沢

旧堀之内町大石に位置する御嶽山に程近い地域である。東経138度56分、北緯37度13分に位置し、杉林に囲まれた沢沿いの道を踏査した。

3) 鏡が池周辺

旧入広瀬村大栃山に位置する鏡が池は、東経139度03分、北緯37度21分付近に位置し、雑木林に囲まれた池の周辺を踏査した。また、「野山の幸資料館」付近の破間川兩岸を調査した。

4) 魚野川周辺

旧小出町の太浦新田付近と新柳生橋の2か所を中心に定点観察を行った。太浦新田は東経138度11分、北緯37度11分付近に位置し、梅田養魚場周辺での観察を行った。新柳生橋は、東経138度57分、北緯37度13分付近に位置し、橋の上から魚野川周辺の観察を行った。

(3) 調査方法

本調査の調査員及び探鳥会講師は、小出野鳥の会及び新潟県立六日町高等学校教諭の深澤和基氏から協力を得た。各探鳥会に調査員を2～3人配置し、野鳥の同定や探鳥会での指導を行った。

本調査は、他団体の企画と合同での調査についても実施した。こまみの湯周辺では、魚沼地域振興局健康福祉部（魚沼保健所）と魚沼・小千谷地域理科教育センターが主催している探鳥会と合同で実施した。その他、探鳥会は開催日ごとに市報で参加者を募集した。

調査期間は夏鳥・留鳥の繁殖時期にあたる5月、また冬鳥・留鳥の越冬時期の計4回実施した。夏鳥調査は早朝5時30分から10時の間の約3～4時間、冬鳥調査は9時から12時00分の約3時間行った。

調査方法は予め指定したルートを踏査し、目視と鳴き声で同定を行った。また調査は各調査地につき1回とした。

なお、本調査は、夜行性鳥類（フクロウ、ヨタカ等）、タカの渡りに関する調査は含まない。

鳥類調査でのボランティア登録数は14名であり、探鳥会参加人数は延べ56名であった。各調査日時、調査員及び探鳥会参加人数は以下のとおりである。

1) こまみの湯周辺

5月11日（日）6:00～9:00 調査員：桑原 和寿、角屋 禮二

探鳥会参加人数：20名

（魚沼地域振興局健康福祉部、魚沼・小千谷地域理科教育センターと合同）

2) 杉ノ入沢

5月18日（日）6:00～9:00 調査員：桑原 和寿、角屋 禮二、深澤 和基

探鳥会参加人数：12名

3) 鏡が池周辺

5月25日（日）5:30～10:00 調査員：桑原 和寿、深澤 和基

探鳥会参加人数：15名

4) 魚野川周辺

2月22日（日）9:00～12:00

調査員：桑原 和寿、角屋 禮士、深澤 和基

探鳥会参加人数：9名

（4） 調査結果

1) 鳥類確認種数

本調査での確認種数は、こまみの湯周辺21科31種、杉ノ入沢27科38種、鏡が池周辺20科30種、魚野川周辺15科27種で、合計32科60種であった。調査結果は、別表2014年度調査鳥類目録に示す。目録の科名、種名、学名及び並び順は「日本鳥類目録改訂第7版掲載鳥類リスト」（日本鳥学会 2012年）によった。

2) 確認された絶滅危惧種

本年度調査で確認された絶滅危惧種は、新潟県準絶滅危惧種、環境省絶滅危惧Ⅱ類指定のサシバ（タカ科）*Butastur indicus*、ハヤブサ（ハヤブサ科）*Falco peregrinus*、サンショウクイ（サンショウクイ科）*Pericrocotus divaricatus*、新潟県、環境省ともに準絶滅危惧種指定のハチクマ（タカ科）*Pernis ptilorhynchus*、オオタカ（タカ科）*Accipiter gentilis*、ノジコ（ホオジロ科）*Emberiza splurata*、新潟県準絶滅危惧種指定の、イカルチドリ（チドリ科）*Charadrius placidus*、イソシギ（シギ科）*Actitis hypoleucos*、アオバズク（フクロウ科）*Ninox scutulata*、コサメビタキ（ヒタキ科）*Muscicapa dauurica* の8科10種であった。

(5) 2014年度鳥類調査の評価と今後の展望

魚沼市自然環境保全調査委員会委員

小出野鳥の会 桑原和寿

① 鳥類生息状況の概要

魚沼市では水辺の鳥から高山の鳥まで、多くの種類が多様な自然の中で生息している。

深い積雪の時期では、限られた餌場環境に冬を過ごす野鳥をはじめとした多くの生物が集まるのも特徴的である。

魚沼市自然環境保全調査の野鳥に関する調査は2014年度で3年目となる。

魚沼市の野鳥の生息状況に関する情報は決して少なくはないが、抱える地域の面積や多様性からすると、まだ十分とは言い切れない。

以前から、様々な機関、大学、同好の会や個人で、多くの調査や研究が、現在の魚沼市となった地域で行われ、本調査はそうした蓄積をもって、具体的な方向を定め、スタートした。

初年度の2012年度には、過去の貴重な観察情報の収集と整理を行い、そこから読み取った環境変化の確認や補完の意味を持った野外での調査を行った。また、環境変化の視点からは、市内で観察された絶滅危惧種などの希少種の現在の状況確認にも重点が置かれた。その結果として、市内での観察記録が204種から成る魚沼市鳥類目録がまとめられた。

2年目の2013年度は、重要な観察情報の密度が高い地域で、前年度調査できなかった広神、守門地域を加えて、市民に広く参加を呼びかけた、探鳥会形式の調査を中心に行った。併せて、市内で観察される、日本固有種であるヤマドリ、アオゲラ、セグロセキレイ、魚沼で繁殖の多いとされるノジコの生息状況の把握にも取り組み、ヤマドリの生息数が少なく、ほかの3種は安定的に観察されていることを確認した。

今年度は、継続調査地の3箇所に加え、新たに入広瀬地域の鏡が池周辺を探鳥会形式で調査するとともに、年度を通して調査員などからの観察情報の収集と整理に取り組み、その結果、以前からの情報や3年間の調査を通じた観察種と個体数の変動状況を確認した。

② 注目すべき鳥類など

春期の探鳥会では、市内の記録では初となるイスカが観察された。イスカは、先端が交差した珍しい形の嘴を持つアトリ科の冬鳥で、前年より県内各地で観察情報が多かった。

このほかには、春の繁殖時期のサンコウチョウが例年よりも多く見られ、増加傾向が感じられるキビ



図 3-1 イスカ (アトリ科)

タキは昨年同様で、比較的容易に姿が観察できた。

飛来数の変化が年によって大きいアトリは、2014年の春では例年よりも数が多く、4月下旬には、青島で約1時間のうちに500羽を超えるアトリが通過して行く姿を観察した。

渡り鳥の渡来状況は、越冬地、繁殖地や、渡りの移動経路も含めた環境の影響の結果であり、遥か何千km先から到着した魚沼市で、無事に繁殖や越冬をして、元の場所へ帰って行ける環境を提供したい。

一方、魚野川ではここ数年で、洪水時の土砂流入と堆積した土砂の除去工事、川原のシロヤナギやオニグルミなどの大きくなった樹木の伐採、中州での砂利採取など、比較的大きな環境変化があり、水中の生物を含めた生態系への影響を、注意深く見て行く必要がある。魚沼市内の魚野川は、川岸と周辺の状態、植生、中州、流れの速さの変化、水深、川底の状態など、変化に富み、それぞれの環境に適した多様な生物が生息しているが、環境変化のせいかヤマセミ、カワセミ、ヒナを連れたカルガモなど、魚野川の身近な野鳥の観察頻度は、低下傾向が感じられる。観察を続けて経過を確認したい。

水のある環境は、一年を通して多くの生物が生息し、生態系全体への影響も大きい。特に魚沼市の積雪期では、野鳥が餌を取る場所としても重要である。川や池、湖だけでなく、水田と水路なども大事な水場であり、特に、コンクリートなどで整備されていない昔ながらの水路には、その幅を問わず多くの種類の生物が生息し、サギ類、セキレイ類などに餌場として利用されている。

漁業被害が懸念されるカワウは、以前の「7月から10月の間に100羽を超える大きな群れが何度も飛来し、ほかの時期はほぼゼロ」という状態から通年数羽が魚野川に定着するように変化した。2014年の夏期には、100羽前後の群れの通過や、長岡市（旧川口町）との境の八郎場付近の中州などで休んでいる様子が数回観察されている。

かつて県内有数の規模だった、干溝のアオサギのコロニー（集団営巣地）は分散し、現在では、小出地域の市街地付近に10羽前後が集まって営巣している状況が点在するようになった。人の生活圏と隣接しているため、コロニーの規模が拡大した場合には、糞害や鳴き声の騒音などが心配される。



図 3-2 アトリ（アトリ科）



図 3-3 カルガモ（カモ科）



図 3-4 カワウ（ウ科）

環境省、新潟県の絶滅危惧種などの希少種としては、イカルチドリ、イソシギ、ハチクマ、サシバ、オオタカ、アオバズク、ハヤブサ、サンショウクイ、コサメビタキ、ノジコ、が今年度の探鳥会で確認されている。このほかの希少種については、ホオジロガモ、チュウサギ、ミサゴ、オジロワシ、オオワシ、ハイタカ、イヌワシ、クマタカ、ハヤブサ、チゴモズなどについての情報があった。

2014年に市内外で大量発生したマイマイガが地面に落ちたものを、スズメ、ハクセキレイなどが食べる姿を何度か見たが、積極的に多くを餌とする様には見えなかった。現時点で、マイマイガの大量発生、鳥類への影響は不明である。

既存の生態系や、在来種への影響の大きい、外来の鳥類である、ワカケホンセイインコ、ソウシチョウ、ガビチョウ類は観察されなかった。

③ 調査結果の評価と今後の展望

自然環境保全調査のなかの野鳥分野の調査は、食べるもの(消費者)、食べられるもの(供給者)の食物連鎖の中で、野鳥が消費者側の最先端付近に位置付けされる生物であることが、重要な意味を持つ。

生態系に変化が起きたときには、消費者側の変化は比較的早く顕著に出やすい。また、野鳥は環境が自らに適さなくなれば、より良い場所を求めて、広範囲に移動が可能である。魚沼市に野鳥がたくさんいるということは、豊かな自然があるという証にほかならない。

現在の野鳥の状況を、正確に調査して記録を残し、別の時点と比べることで、環境の変化の兆候や、環境整備(あるいは環境破壊)が与えた影響などが見えてくると考えられる。

市内の野鳥の生息情報を、将来も安定的・継続的に集約し、整理分析して発信する仕組みを整えることも必要とされている。

本調査の中心は、広く市民に参加を呼びかけた探鳥会形式で行い、より多くの人から地元 naturally に興味や理解を持ってもらえるきっかけ作り、という意味も持たせている。次世代を担う子供達からも喜んでたくさん参加してもらえるような、野鳥だけに限らない観察会などのイベントも、今後、検討したい。

人の生活が近代化した現在でも、自然環境は我々の生活にも深く関わっているが、農耕などが中心の時代では、自然と人の生活がさらに関わりあっていた部分が多く、その名残も残っている。

例えば、昔、魚沼には田んぼにトキがたくさんいて、田植え直後の苗を踏み荒らす害鳥



図 3-5 サシバ (タカ科)



図 3-6 コサメビタキ (ヒタキ科)

だったと言われている。そして、この地域の鳥追い歌では「一番憎い鳥の一種のトキは信濃の国（長野県）から追われて来て、最後は佐渡へ追いやってしまえ」と歌われているなど、文化や伝統、自然と環境変化などを絡めて次世代につなげて行くことも、今の世代の重要な課題である。

また、生態系は全体で微妙なバランスを取りながら成り立つもので、野鳥のみではなく、ほかの生物や環境について広く情報を把握し、次の世代にも、この豊かな自然環境を継承するために、本調査が活用されることを期待したい。



図 3-7 トキ（トキ科）

(6) 参考文献

- ・魚沼市市民課環境対策室 編 2012年 「魚沼市植物相調査 中間報告書」 魚沼市
- ・魚沼市環境課環境対策室 編 2013年 「平成24年度魚沼市自然環境保全調査報告書」 魚沼市
- ・魚沼市環境課環境対策室 編 2014年 「平成25年度魚沼市自然環境保全調査報告書」 魚沼市
- ・叶内拓哉 ほか 1998年 「山溪ハンディ図鑑 日本の野鳥」 山と溪谷社
- ・叶内拓哉 2006年 「野鳥と木の実ハンドブック」 文一総合出版
- ・叶内拓哉 2008年 「絵解きで野鳥が識別出来る本」 文一総合出版
- ・北魚沼地区理科教育センター 1987年 「野鳥の種類と数は季節によってどのように変化するか」
北魚沼の自然と理科教育第14集 北魚沼地区理科教育センター
- ・桑原和寿、佐藤武、角屋禮士、柳瀬昭彦 「小出野鳥の会 会員フィールドノート」
- ・富永弘 編著 2007年 「原虫野湿原の自然 —植物・野鳥・水生動物等の観察—」 魚沼自然調査グループ
- ・新潟県環境生活部環境企画課 編 2001年 「レッドデータブックにいがた」 新潟県環境生活部環境企画課
- ・新潟県環境生活部環境企画課 編 2014年 「新潟県第2次レッドリスト 鳥類編」
新潟県環境生活部環境企画課
- ・日本鳥学会 2012年 「日本鳥類目録改訂第7版掲載鳥類リスト」 日本鳥学会
- ・柳瀬昭彦 1984年 「北魚沼郡の鳥類リスト（初版）」 小出野鳥の会
- ・柳瀬昭彦 1987年 「北魚沼郡の鳥類リスト（改訂版）」 小出野鳥の会
- ・柳瀬昭彦 1995年 「北魚沼郡の鳥類リスト（第2版）」 小出野鳥の会
- ・柳瀬昭彦 編 2013年、2014年 「小出野鳥の会だより（No272～No277）」 小出野鳥の会
- ・渡辺隆 ほか編 1999年 「見に行こう身近な自然 北魚沼自然観察ガイド」 北魚沼地区理科教育センター

(写真提供)

池田修、桑原和寿

2014年度調査鳥類目録

合計確認種数		32科60種		◎	姿が確認できた種			
				○	声だけが確認できた種			
No	科名	種名	学名	調査日	5月11日	5月19日	5月25日	2月22日
				調査地	こまみの湯	杉ノ入沢	鏡が池	魚野川
				晴れ	くもり	くもり	晴れ	
1	キジ科	ヤマドリ	<i>Syrnaticus soemmerringii</i>			○		
2	カモ科	ヒドリガモ	<i>Anas penelope</i>					◎
3		マガモ	<i>Anas platyrhynchos</i>					◎
4		カルガモ	<i>Anas zonorhyncha</i>		◎	◎	◎	◎
5		コガモ	<i>Anas crecca</i>					◎
6		カワアイサ	<i>Mergus merganser</i>					◎
7	カイツブリ科	カイツブリ	<i>Tachybaptus ruficollis</i>					◎
8	ハト科	キジバト	<i>Streptopelia orientalis</i>		◎	◎	◎	◎
9		アオバト	<i>Treron sieboldii</i>				◎	
10	ウ科	カワウ	<i>Phalacrocorax carbo</i>		◎	◎		◎
11	サギ科	アオサギ	<i>Ardea cinerea</i>		◎	◎	◎	◎
12		ダイサギ	<i>Ardea alba</i>					◎
13	カッコウ科	ホトギス	<i>Cuculus poliocephalus</i>				○	
14		ツツドリ	<i>Cuculus optatus</i>			○		
15	チドリ科	イカルチドリ	<i>Charadrius placidus</i>					◎
16	シギ科	イソシギ	<i>Actitis hypoleucos</i>				◎	
17	タカ科	ハチクマ	<i>Pernis ptilorhynchus</i>			◎		
18		トビ	<i>Milvus migrans</i>		◎			◎
19		オオタカ	<i>Accipiter gentilis</i>					◎
20		サシバ	<i>Butastur indicus</i>		◎	◎	◎	
21		ノスリ	<i>Buteo buteo</i>				◎	◎
22	フクロウ科	アオバズク	<i>Ninox scutulata</i>		○			
23	カワセミ科	カワセミ	<i>Alcedo atthis</i>			○		
24	キツキ科	コゲラ	<i>Dendrocopos kizuki</i>		○	○	○	
25		アオゲラ	<i>Picus awokera</i>		○	○	○	
26	ハヤブサ科	チョウゲンボウ	<i>Falco tinnunculus</i>			◎		
27		ハヤブサ	<i>Falco peregrinus</i>					◎
28	サンショウクイ科	サンショウクイ	<i>Pericrocotus divaricatus</i>		◎	◎	◎	
29	カササギヒタキ科	サンコウチョウ	<i>Terpsiphone atrocaudata</i>			◎		
30	カラス科	カケス	<i>Garrulus glandarius</i>		◎	○	◎	◎
31		ハシボソガラス	<i>Corvus corone</i>		◎	◎		◎
32		ハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos</i>		◎	◎	◎	◎
33	シジュウカラ科	ヤマガラ	<i>Poecile varius</i>		◎	◎	◎	
34		シジュウカラ	<i>Parus minor</i>		○	○	○	◎
35	ツバメ科	ツバメ	<i>Hirundo rustica</i>			◎	◎	
36		イワツバメ	<i>Delichon dasypus</i>		◎	◎		
37	ヒヨドリ科	ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i>		◎	◎	◎	
38	ウグイス科	ウグイス	<i>Cettia diphone</i>		◎	○	◎	
39		ヤブサメ	<i>Urosphena squameiceps</i>		◎	○	○	
40		エナガ科	エナガ	<i>Aegithalos caudatus</i>		○	◎	
41	ムシクイ科	センダイムシクイ	<i>Phylloscopus coronatus</i>		○	◎	◎	
42	メジロ科	メジロ	<i>Zosterops japonicus</i>		○	◎	○	
43	ヨシキリ科	オオヨシキリ	<i>Acrocephalus orientalis</i>			○		
44	ムクドリ科	ムクドリ	<i>Spodiopsar cineraceus</i>			◎		◎
45	カワガラス科	カワガラス	<i>Cinclus pallasii</i>					◎
46	ヒタキ科	クロツグミ	<i>Turdus cardis</i>		○	○		
47		シロハラ	<i>Turdus pallidus</i>					◎
48		ジョウビタキ	<i>Phoenicurus aureus</i>					◎
49		コサメビタキ	<i>Muscicapa dauurica</i>		◎			
50		キビタキ	<i>Ficedula narcissina</i>		◎	◎	◎	
51		オオルリ	<i>Cyanoptila cyanomelana</i>		◎	◎	◎	
52	スズメ科	スズメ	<i>Passer montanus</i>		◎	◎	◎	◎
53	セキレイ科	キセキレイ	<i>Motacilla cinerea</i>		◎		◎	◎
54		ハクセキレイ	<i>Motacilla alba</i>		◎	◎		◎
55		セグロセキレイ	<i>Motacilla grandis</i>				◎	◎
56	アトリ科	カワラヒワ	<i>Chloris sinica</i>		◎	◎	◎	
57		イスカ	<i>Loxia curvirostra</i>				◎	
58		イカル	<i>Eophona personata</i>			○		
59	ホオジロ科	ホオジロ	<i>Emberiza cioides</i>		◎	◎	◎	
60		ノジコ	<i>Emberiza sulphurata</i>			◎		
				◎:姿が確認できた種	23種	26種	23種	27種
				○:声のみ確認できた種	8種	12種	7種	0種
				合計	31種	38種	30種	27種

